

環境科学同窓会通信 第31号

Environmental Science Alumni Association Newsletter Vol. 31

目次/Content

1. 「『知りたい』を原動力に楽しんだ大学院生活」
寺田 千里（北海道大学文学研究院/合同会社エゾリンク）

2. 「貴重な経験ができた2年間」
宮崎 紀子（王子木材緑化株式会社）

「知りたい」を原動力に楽しんだ大学院生活

寺田千里（北海道大学文学研究院/合同会社エゾリンク）

生物圏科学専攻博士後期課程修了 2012年3月

すべては、「屋久島のシカは短足かもしれない」とぼろっとこぼした一言から始まりました。そこから、私は南日本島嶼に生息するニホンジカの形態的な地理的変異を明らかにすること、特に足の長さの違いが適応進化の結果であることを検証する研究に取り組むことにしました。自分の「やりたい」「知りたい」という気持ちを大切に、ほとんど野放しのような形で調査に送り出してくださり、学術的視点を育んでくださった指導教員の齊藤隆さんには、本当に感謝しています。

調査では、屋久島をはじめ、さまざまな島々を訪ね歩きました。地域の方々にお世話になりながら居候生活を送り、シカの狩猟に同行したり、死んだ個体を探し歩いたりしました。頭骨や足の骨、そしてお肉を採取して持ち帰るという生活は、今振り返ってみても、大学院生という立場だからこそできた、贅沢で少し風変わりなフィールドワークだったと思います。

一年のうち、約三分の一は調査地で過ごしました。現地で出会った方々とのやりとりや、調査の合間に見た風景、土地の味、狩猟の楽しさ、そして自分の手と体を使って集めたデータの重みは、今も身体に刻まれています。

研究室に戻ると、そこにはさまざまな対象種を扱う仲間たちがいました。週末になると（いや、週末でなくても）、調査から持ち帰ったサケやシカ、山菜などを材料に料理をつくり、みんなでお酒を飲みながら語り合いました。どの料理も絶品で、それぞれのフィールドの話を肴に語り合った時間は、かけがえのない思い出です。研究が思うように進まないときも、こうした場があったからこそ、お互いに励まし合い、支え合いながら前に進むことができたのだと思います。

大学院で学んだ生態学の基礎的な知識や、調査を通じて経験した地域・社会とのかかわり、そして野生動物の管理について考えた日々は、「生態学の知識をどう社会に還元できるか」という問いへとつながりました。長い研究員生活を送る中で、この問いを分かち合える仲間とともに合同会社エゾリンクを設立し、環境教育や地方活性化コンサルティングなど、自分たちにできる事業のあり方を模索してきました。そんな紆余曲折を経て、この4月からは文学研究院の助教として、地域科学研究室に所属し、現在の研究へとつながっています。

家事と育児に追われる今では、かつてのように自由にフィールドへ出ることは難しくなりましたが、大学院時代の経験は、今も私の中で大切な糧となっています。そして今もなお、「やりたい」「知りたい」という気持ちを原動力に、研究の道を歩み続けながら、生態学の知識をどのように社会へ還元していくか、そのあり方を模索しています。



研究室でよく行われた飲み会。この日は、ほぼシカ肉料理！

貴重な経験ができた2年間

宮崎 紀子（2016年3月環境起学専攻修士課程修了・王子木材緑化株式会社）

卒業してから9年余りが経ちますが、環境科学院で過ごした2年間は今も鮮明に思い出せるほど、記憶に色濃く残っています。

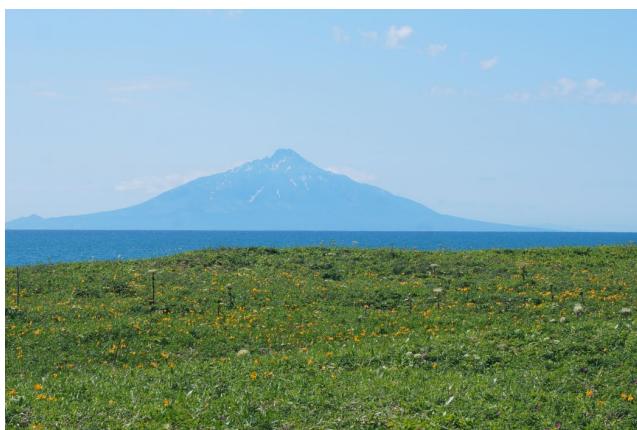
同期と参加した釧路湿原マラソン、大雪山で氷河地形を観察した実習、別寒辺牛川をカヌーで下りながらの湿原観察、厚岸臨海実験所での大黒島アザラシ観察の忘れられない船酔い。どれも貴重で刺激的な体験でした。

研究では露崎史朗教授のもと、サロベツ湿原泥炭採掘跡地でのミズゴケ復元の一端を探りました。大学時代は千葉大学工学部に所属していたため、生物まじりや植物生態の知識はほとんどゼロに等しい状態でした。そんな私を何とか卒業まで導いてくださった露崎先生には感謝の気持ちでいっぱいです。

月に一度のサロベツ調査は大学院生活の楽しみのひとつでした。毎回違った表情を見せる利尻富士、湿原に広がる植物、調査後の豊富温泉や大盛りのご飯。札幌から遠く300km離れた湿原へ初めて向かう日の高揚感と少しの不安は、今でも忘れられません。

修了後は王子木材緑化に就職し、帯広、札幌、東京を経て、現在は名古屋で働いています。鼻セレブやnepiaといったティッシュの原料となる木材チップの調達を担当し、東は栃木、西は京都までチップを求めて走り回る日々です。卒業後も会社の関係で空知単板100kmウォークや手稲トレイルランへの参加、アポイ岳登山など、北海道との縁も続いています。

環境科学院で学んだ「まずやってみよう」という姿勢は、今の仕事や営業活動にも活かしています。あの2年間があったからこそ、今の自分があると言っても過言ではありません。進学して本当に良かったと心から思っています。



ある6月の利尻富士



サロベツ湿原のワタスゲ

発行：環境科学同窓会事務局

〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 5 丁目
北海道大学 大学院地球環境科学研究院内

Fax: 011-706-4867

e-mail: home-coming@ees.hokudai.ac.jp

Issuer: Environmental Science Alumni Association Office

Graduate School of Environmental Science, Hokkaido
University

Kita 10 Nishi 5, Kita-ku, Sapporo 060-0810, Japan

Fax: 011-706-4867

E-mail: home-coming@ees.hokudai.ac.jp

バックナンバーは同窓会HPでご覧に頂けます。

www.ees.hokudai.ac.jp/alumni/main/liaison.html (日本語)

You can visit our back issues page here:

www.ees.hokudai.ac.jp/alumni/main/liaison-e.html (English)